



重症熱性血小板症候群 (SFTS)

2018.2.5

■ マダニが媒介する感染症

近年、マダニが媒介するウイルス感染症（重症熱性血小板減少症候群：SFTS）が増加しており、イヌからヒトへの感染例も報告されました。SFTSは2011年に中国の研究者が発見したウイルスが原因で起こる感染症です。主にウイルスに感染したマダニに咬まれることで感染し、日本や中国・韓国で患者の報告があります。マダニは森林など屋外に生息する大型のダニで、SFTSウイルスを持っているものは5%ほどです。日本国内でヒトへの感染に関わっているマダニは、フタトゲチマダニとタカサゴキラマダニです。患者は2013年に40人、2014年に61人、2015年に60人、そして2017年が85人でうち7人が亡くなりました。これまで国内では西日本を中心に315人の発症例があり、60人が死亡、致死率はなんと20%です。

ヤブや森林ではマダニに咬まれないように肌の露出は極力避けましょう



■ 国内での症例と感染経路

2017年は日本紅斑熱などダニを媒介とする他の感染症も多く発症し、例年に比べてマダニが多い年でした。ウイルスに感染すると、6～14日間の潜伏期間を経て、風邪に似た症状が出ます。重症化すると意識障害や言語障害のほか、下血を起こして死に至ることもあります。高齢になるほど重症化するリスクが高まります。

マダニの多くは春から秋にかけて活動が活発になります。そのためSFTSの発症が多くなるのが5～8月です。現在、SFTSに対する有効な治療薬やワクチンはなく、発症した場合には対症療法が中心です。国立感染症研究所や医療機関のチームが治療法の臨床研究を進めていますが、まだ有効な治療法は確立されていません。マダニに咬まれないようにするには入らないようにしましょう。止むを得ず入る場合にはできる限り肌を露出しないようにしましょう。ペットが感染している場合もあるので、ペットには素手で触れないようにし、咬まれないように注意しましょう。動物病院で感染の有無を確認するのも良いでしょう。

SFTSウイルスはヒトだけでなく、シカやイノシシなどの動物にも感染します。厚生労働省によれば、2016年、西日本の女性が野良ネコに咬まれた後にSFTSを発症し、死亡したとのこと。ネコからヒトへの初めての感染です。同様にSFTSを発症した飼いイヌを介護していた男性がSFTSに感染していたことが報告され、その後回復しましたが、こちらもイヌからヒトへの初めての感染例となりました。ウイルスは唾液や血液、糞便などに含まれるので、SFTSを発症している動物に触れた手で自分の目の粘膜や傷口などに触れると、そこから感染する可能性があります。通常、健康な状態のペットからは感染する可能性は低いとみられています。

■ ウイルス感染と予防法

動物が感染源となる感染症を人畜共通感染症と呼びます。WHOは自然の条件下で伝搬して起こる感染症と定義しており、200種類以上の寄生虫・細菌・ウイルスがあります。特に問題なのがウイルス感染症です。ウイルスは地球上における最小の生物で、肉眼では見ることができません。独立して生きることができないので、生きている細胞に感染して生きながら常に繁殖の機会を伺っています。他者の細胞に感染することでしか生きられないウイルスが絶えず新たな感染先を探すのは当然のことです。

ウイルスがヒトに感染する方法には直接感染と間接感染があります。直接感染では、血液や唾液・精液などの液体を介して移動します。間接感染は、動物や昆虫・寄生虫などを介して感染します。ウイルスの侵入口は、口や鼻などの呼吸器・肛門や尿道などの泌尿器・生殖器など、外部に接する部位です。人体に侵入したウイルスは標的にした臓器に入り増殖します。その結果、カラダは病気の症状を示します。

SFTSのウイルス感染症はマダニを介して間接感染します。マダニには殺虫剤も効きません。感染症予防には手洗いの励行が基本です。そして自身の免疫力を上げることも大切です。ストレスをためずに、規則正しい生活を心がけましょう。